慶長丁銀の極印鑽

http://www.kyoto-arc.or.jp
（公財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

写真１　発掘調査で見つかった極印鑽

はじめに　令和３年１月から３月に京都市中央卸売市場第一市場で行なった発掘調査で、豊臣秀吉が築造した御土居の濠の埋土から、重厚な鉄製品が出土しました（図１）。出土時は鉄錆に覆われていたため、用途不明鉄製品として取り上げました。持ち帰って鉄錆を落としたところ、大黒天像と「常是」の文字が浮かび上がり、慶長丁銀に極印を打ち付けるための鑽であることが判明しました（写真１）。慶長丁銀の極印鑽としては、全国で初めての発見です。なお、‘極印’とは、金銀貨や器物などの品質保証、偽造防止のため表面に打つ印のことです。

慶長丁銀と銀座　慶長丁銀とは、慶長年間のみに鋳造されたものではなく、慶長６年（1601）から元禄８年（1695）の 95 年間にわたり、江戸幕府によって鋳造されたナマコ形の秤量貨幣のことを指します（写真３）。両端（上下）と中央の片脇の３箇所に「常是」の文字と大黒天像の極印が打たれ、その他の両脇には「寶 常是」の文字の極印が打たれています。

銀座の起源は、豊臣秀吉が堺と京都の銀吹屋を大坂に集め「常是座」を結成させたことにはじまります。その後、徳川家康が堺の銀吹師であった湯浅作兵衛を取り立て、「大黒常是」を名乗らせ、銀貨製造の最高責任者である銀吹人に任命しました。慶長丁銀の極印の大黒天像は、その姓にちなんだものです。家康は丁銀の全国的供給

図１　極印鑽出土地点と京都銀座の位置

写真2　極印鎹の印面

をはかるため、伏見に銀座を設立し、慶長丁銀の鋳造を行ないました。慶長13年（1608）、江戸幕府は伏見の銀座を京都の室町と烏丸の間、二条から三条までの4町に移転させ、それ以降、慶長丁銀はここで製造されました。

出土した極印鎹　出土した極印鎹は鉄製で、全長約11.3cm、重量は532gあります。図2を参考にすると、最上部は極印槌を繰り返し打ち付けたため、ひしゃげて潰れています。極印面は、横約3.4cm、縦約1.7cmの長方形で、向かって右に「常是」の文字、左に2つの米俵の上に乗り、福袋と打出の小槌を持った大黒天の姿が陰刻されています（写真2）。また、科学分析の結果、印面からは地金のFe（鉄）以外に、Cu（銅）、Ag（銀）、Pb（鉛）と、わずかなAu（金）が検出されました。

現存する慶長丁銀に打たれた極印と出土例の極印を比較検討した結果、全く同じ印形のものは確認できませんでした。近似するものから類推すると、最も古いタイプではなく、元和・寛永期以降のものではないかと考えられます。それは御土居の濠から一緒に出土した土器類の年代とも矛盾しません。そうすると、出土した極印鎹は、京都銀座で使用された可能性が高いといえます。

おわりに　出土した極印鎹は、最上部が潰れていることや、印面から慶長丁銀に含まれるAg（銀）やCu（銅）が検出されたことなどから、実際に慶長丁銀に打刻するために使用されたと考えられます。しかし、本来は、偽造防止のために印面を潰して廃棄することが原則であるべきものが、京都銀座の所在地である両替町通御池周辺から遠く離れた御土居の濠から出土した理由は謎のままです。また、文献史料から丁銀の偽造品が製造されていたこともわかっており、偽造品製造のための道具であった可能性も残ります。いずれにしても、慶長丁銀の極印鎹は他に例がなく、貨幣製造史を考える上でも貴重な遺物であることは間違いありません。　（柏田有香）

図2　極印打上所の図　銀座巻物［1］国立国会図書館蔵

写真3　慶長丁銀
（長径9.3cm・短径3.5cm・厚さ0.6cm）
東京国立博物館所蔵